

発行所(郵便番号100)
 東京都千代田区丸の内2-4-1
 丸の内ビルディング617号室
 社団法人スウェーデン社会研究所
 Tel (5412) 0503
 Fax (5412) 0549
 編集責任者 岡 沢 憲 夫
 印刷所 関東図書株式会社
 定価400円(年間購読料四千元)
 1997年7月25日発行
 No.303 第28巻6・7合併号
 (毎月1回25日発行)
 昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

No. 303 Bulletin Vol. 28 No. 6・7 合併号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
 (The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
 Marunouchi-Bldg., No. 617 Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

去る5月26日(月)午後4時よりスウェーデン国王歓迎レセプションが、スウェーデン大使館地下のクラブルームにて、当研究所の姉妹機関である社団法人日瑞基金の主催により開催された。

日瑞基金の役員はじめ、スウェーデン側からは、瑞日基金事務局のフリーウッド氏も出席されて大変盛会であった。当研究所の役員では、竹市知弘常務理事、松前紀男理事、潮見憲三郎理事、高須祐三顧問、内藤英憲顧問、藤牧新平顧問、福田雅一評議員が出席された。



スウェーデン国王と握手される日瑞基金会長 ▶



▲ スウェーデン国王との歓談

目次

スウェーデン国王歓迎レセプション	1
老人福祉・日本とスウェーデン	2
スウェーデン環境ニュース	4
研究会その他のご案内	4
新刊紹介	5
スウェーデンキャンペーンを見て、1. 版画「赤毛のウルム」	5
Joint Industrial Safety Council's Newsletter 1996.No. 2より	6
平成8年活動メモ	8

日本とスウェーデン

Welfare for old people — Japan and Sweden

顧問 小野寺百合子

Advisar Ms. Yuriko Onodera

日本でおじいさんとおばあさんが子や孫に囲まれて暮るのが最高の幸福とされていたのは、つい先頃までのことであった。今日現在、三世代団欒の図は特にテレビドラマなどに出ることはあっても、日常生活の中で身近かには見られなくなった。夫婦の間の子供の数が減ったから、子供が成長して巣立ってしまうと夫婦はあつという間に二人きりになる。親子がともに暮らすのは子供が未成年の間だけである。世帯構成の人数は減る一方だから一世帯の容れものもワンルームないし小住宅が断然多くなる。曾てスウェーデン人から羨ましがられた日本の家族制度は急速に消えつつあり、両国の家庭はごく近いものになってきた。とはいっても、今日に至るまでに老人がたどってきた経過は大違いなのだから、老人問題の質の差を踏まえた上でないと論ずることはできない。

今から半世紀まえのスウェーデンではすでに個人主義が徹底していて、老親が子供に扶養させようとは親も子も思ってもいなかった。親の生活は親自身の責任であって、生活ができなくなると社会の世話になること、すなわち公的扶助を受けるのが当然であった。同じ頃日本の老親はまだ80%以上が子の世帯に含まれていたのであったから、それ以後にはじまった親離れ子離れはまだまだ日が浅い。

戦後日本の敗戦から立ち上って復興をはじめた頃、スウェーデンは第2次世界大戦を中立で通したために無傷で残り、早速に戦勝国敗戦国両方の復興に寄与して、経済の大繁栄を遂げたのであった。その富を社民党政権は、国民全体を対象にした社会福祉政策に投じて、着々と世界に誇る福祉国家を築いていったのである。1932年に社民党が

政権をとってから、全国民の1/4をアメリカへ移住させなければならなかったほどの貧乏国を、働く限りは十分に食べられる国につくり上げたのであった。そこに第2次世界大戦が起ったのでスウェーデンは戦争に巻き込まれないために悲壮な決心で武装中立に国費を傾け、働けない者（老人や身障者など）は悲惨な状態のままに捨ておかれた。

スウェーデンの戦後の社会政策は、戦前に取り残した貧困者の救済から始めたので、それが老人福祉のスタートになった。当時の目標は経済的に食べられない国民を無くす政策で、個々の国民に公平に国民年金（1913年より小額ながら国民皆年金があった）を、生活の基本が賄えるまでの額に増額することであった。日本では戦後落ちつきを取り戻してきた頃、福祉国家スウェーデンを見習えという声が高まって、続々視察団をくり出すようになったが、当時の日本は国を挙げて行政の復興に邁進中であって、一方で、家族制度の崩壊により老人問題が起りはじめていたにもかかわらず、それは家族内の私的問題とみなされ公的に老人を顧みる配慮も余裕もなかった。両国の事情はあまりにもかけ離れていたから、視察の効果があったとは思われない。

日本では経済の復興が進むにつれて、老人問題も顕在化してきて、昭和38年に老人福祉法が制定された。法律はできても実際問題として公的な老人対策はすぐには間に合わず、民間で思い思いの老人ホームができ在宅サービス保健もはじまった。民間となると営利非営利さまざまの段階の事業が現われたが、利用者負担も相当にあるので利用範囲は限定される。そのうちによりやく国及び地方

自治体が設置費と運営費を捻出して、民間事業に
依託する制度が生まれ、低所得層にも福祉がいく
らか行きわたるようにはなったが、量的にまだま
だ不十分である。

スウェーデンでは戦後一途に発展した社会福祉
は1970年代に完成し、自他ともに世界一を誇った
が、その時すでに行き届いた一律の老人ケアは老
人のいきる意欲を損うという論があって、老人の
ケアはもっと当人の自由意志による選択の余地を
残すべきであるとなった。次いで社会福祉の分野
にも公立公営一辺倒のシステムそのもの、是非が
問われるようになり、老人福祉だけでなく、民間
の自由発想を取り入れ、競争原理を組み込み、国
民は多くの種類の中から自主的に選択すべきであ
り、利用者には充分の負担があって然るべきとい
うことになった。そして国の予算案1992/93には
「選択の自由革命」の言葉が明記させた。折しも
世界経済不況の波がスウェーデンをも襲い、国家
予算もマイナスつづきという時代にはいったので、
福祉行政の公費負担に困難を生じはじめた。最初
に行ったのは、経費節減方法として、社会福祉の
給付額算出の基本となる「基礎額」の見直しであ
った。

ところが1992年9月、スウェーデンは空前の経
済危機に見舞われた。時の連立内閣は野党の社民
党と破天荒の一致共同をして、「危機対策案Ⅰ・
Ⅱ」(Krispaket)を矢継ぎ早に議会に提出して通
過させた。これは社会福祉各制度の公的給付額の
何パーセンテージかづつを削減するものであった。

(当月報第25巻第1号で報告してある)。危機対
象策Ⅰの第1項は、国民年金額を基礎額の100%
から98%に引き下げるものであった。

“Svensk Socialboken”の1996年刷補遺(ルンド社
会単科大学学長Ake Elmer著)によればこの数
字は96%になっている。これを以てスウェーデン
は経済的困難と闘いながらも、誇り高い社会福祉
の水準を下げないように努力しているのがうかが
い知れる。

その高い水準というのを老人福祉についてい
えば次の通りである。1970年代までに達成したとこ

ろは、全国民一律に給付される国民年金が、国民
年金しか所得のない者には補足年金と住宅手当を
追加しても、市民としての文化的生活を保障する
ものになった。老弱のために日常生活が不自由と
なれば、公的なホームヘルパーを派遣し、それで
間に合わなくなった者を老人ホームに収容するの
がコムーレの責任であった。1980年代には老人ケ
アの理想はサービスハウスであるといわれ出した。
これは居住機能の上にあらゆるサービスは備える
が、サービスは居住者の選択によって提供し、附
近の在宅老人にも利用させるものである。ところが
1990年代になると、老人は施設に収容するより
もなるべく長く在宅の生活をさせるのが望ましと
いうことで、ホームヘルパー制度に重点がおかれ
出した。1991年の統計で、65才以上の人口1,532,
000に対してヘルパー数110,000(うちフルタイム
20,000)が養成された。だが、ヘルパーの人的資
源の問題もあり、ヘルプ労働の限界も出てきてい
るので、施設収容の代りの在宅サービスは無理で
はないかとの声が聞かれ出した。それと老人福祉
と家族の役割と、今まで聞かなかった声があるの
も事実である。

日本は経済大国と云われる今日、目立ってきた
のは、公立老人福祉が全国的に建設が進んできた
ことである。新しく建設されるもののレベルは高
く、それでも入居者は所得に応じた料金を支払う
ことになっているので、公的施設の貧者救済的イ
メージはなくなった。日本でも国民福祉年金があ
るから全く無収入の老人はなくなった。ただ日本
の特徴は、収入というとき本人だけではなく扶養
義務者の収入をも計算されることである。

イエンシェーピンの社会単科大学学長、Gerat
Sundström氏は、同市の老人学研究所々長でもあ
り、日本の老人福祉に非常に関心を持っている。
それは日本の制度には公私が混然とまざっていて、
わかりにくい面白いという。「日本とスウェー
デンは最近になって大変近づいてきたのだから、
お互いに勉強し合おうではないか」という氏の言
葉を、日本人は謙虚に受止めなければならないと
思う。

スウェーデン環境ニュース

1996年11月号(創刊号)より転載

「わが国をエコロジー先進国に」 スウェーデン首相が方針表明

スウェーデンのヨーラン・ペーション (Göran Persson) 首相は、9月17日に国会で行った施政方針演説の中で「エコロジー的に持続可能な発展を実現するための取り組みにおいて、わが国は将来、世界を動かす力をもった先進国となろう、エネルギー、水、各種原材料物資といった天然資源のより効率的な利用なくして、今後の社会の繁栄はあり得ないのである」と述べた。

同氏はスウェーデンの福祉制度を築き上げた政党「社民党」の党首で、記者らに対し「持続可能なエコロジー社会の建設を社民党の次期一大プロジェクトとしたい」と語り、さらに、スウェーデンが今後四半世紀のうちにエコロジー社会のモデル国になることも可能であるとの見通しを示した。

首相がこのプロジェクトの柱として考えているのは、1. エネルギーシステムの改革、2. 環境関連法の整備や新たな環境税の導入も含めた新政策の実行と具体目標の設定、3. エコロジー関連公共建設事業、4. 国際協力、の四項目。

首相はまた、環境保護活動で名を知られる二人の人物を、近ごろアドバイザーに任命した。その一人は、議論の割れていたスウェーデン・デンマーク間の架橋プロジェクトへの賛成を社民党が決定した際に同党を離党した、エコロジー評論家のステファン・エドマン (Stefan Edman) 氏、またもう一人は、建築学者のオロフ・エリクソン (Olof Eriksson) 氏で、同氏は、環境にやさしい住宅への建て替え事業に国が長期かつ大規模の投資をすることにより、失業中の建設労働者に職を

与え、同時に社会のエネルギー消費と交通輸送量の削減ならびに資源循環の完全化を実現してはどうかと提唱している。

エコサイクル委員会が電気・電子機器 廃棄物生産者責任法の制定を提言

エコサイクル委員会は先ごろ、電気・電子機器に関する「廃棄物生産者責任法」の制定を提言した。同委員会は、廃棄物生産者責任法の新規分野への導入を促進し、ひいては循環親和型社会を実現することを目的として時限的に設置されている、政府直属の委員会。

なお廃棄物処理法には、「あらゆる製品とその包装材から生じる廃棄物について、輸入、製造、販売を行った者(廃棄物生産者)が環境に害を与えない方法でそれを処理するよう義務づけるための立法措置を将来政府がとりうる」との一文が、1993年から明記されている。また国と産業界の密接な協力の下、同様の責任規定が政令によってすでに定められている分野も存在し、特に包装材やタイヤ、新聞紙、自動車、建設産業廃棄物がそれに該当する。

しかし環境保護庁は、「法律によるあまりに細部にわたる規定は所轄官庁の責任と事務量の増大につながる」として、新法の制定に消極的である。同庁はまた、電気・電子機器に関しては、製造業者らに一番適したシステムが形づくられるよう、業者側に自由な取り組みの余地を与えるべきであるとしている。したがって同庁としては、廃棄物処理法を補足する政令の形で電気・電子機器の廃棄物生産者責任を規定し、それを1998年1月1日から施行するのが最善との考えである。

「スウェーデン環境ニュース」 翻訳：市河俊男
連絡先：(レーナ・リンダル) 電話/ファックス:03-3422-7019

《 ご案内 》

○政治問題研究会

日時 9月25日(木) 午後6:30～8:30
テーマ 「'97スウェーデンの動き…地方自治・政治」
講師 高橋 仁氏(松下政経塾第10期卒業生)
パクション市の自治体の現場の取材の成果とストックホルムの社民党での取材を通して中央政府の最近の状況について解説していただきます。
参加費 一般 1,000円/会員 無料
定員 60人まで(予約先着順)
会場 丸の内三井ビル4F株式会社トーモク会議室
申込先 TEL.03-5412-0503 FAX.03-5412-0549

その他の催し

ストックホルム近代美術館展
ーピカソからウォールホールまでー
1997年7月26日(土)～9月7日(日)
午前10時～午後7時 開催期間中休み無し
Bunkamura ザ・ミュージアム
お問い合わせ 03-3272-8600
◎スウェーデン語講習会秋学期は9月16日から12月15日で開講予定。
※詳しくは、パンフレットを80円切手同封の上
ご請求ください。

『ナチュラル・ステップ — 人と企業の環境教育をめざして — 』

K・H・ロベール／市河俊男訳 2,500円 新評論刊

「環境保護団体」という言葉を耳にしたとき、通常思い浮かべられるのはどのようなイメージであろうか。「モラルを旗印に悪徳企業の環境破壊行為を糾弾する、正義の味方」ではないだろうか。しかし、そのような正義の味方と悪役が取っ組み合いを演じている間であっても、環境破壊がその歩みを止めて待っていてくれるわけではない。このあたりに、従来型環境保護運動の限界が潜んでいるように思われる。

ところが、社会のあらゆる面においてプラグマティック（実用主義的）で柔軟な発想が見られる北欧には、責任追及型やモラル批判型の攻撃的な方法論をとらず、産業界と敵対しないやり方で、着実な成果をあげている環境保護団体がある。それが、スウェーデンの環境保護団体、「ナチュラル・ステップ」である。

ナチュラル・ステップの存在は日本ではまだほとんど知られていないが、本国スウェーデンでは子どもも知っているほどポピュラーな団体であり、周辺諸国でも支部の設立が相次ぐなど、その影響力は世界に及びつつある。本書は、このナチュラル・ステップの設立者であり主宰

者であるカール・ヘンリック・ロペール氏が、市民や企業経営者らに向け、環境問題を考えていく上での指針を、平易な語り口で説いたものである。

意見の違いをめぐる議論するのではなく、まず意見の一致点を確認した上で先に進むコンセンサス・メソッド（統一意見形成法）。

「一個の細胞になったつもりで環境問題を考えよう」との呼びかけ。環境への配慮が業績の向上にもつながった例を提示することで企業を啓蒙し、動機づけていくやり方。著者の示す方法論は、そのどれもがきわめて実用主義的で、決して観念論に墮することがない。

著者はまた、自然の循環と調和した社会の実現のために必要な四つの条件をあげ、これをもとに、いくつかの具体的な環境議論を検証するとともに、企業活動のあるべき姿を提唱している。今後日本でも注目を集めるであろうナチュラル・ステップと、それが依拠する基本理念を知る上で、本書は格好の手引きとなるにちがいない。

〈新評論No67より転載〉 (文：いちかわ・としお)

スウェーデンキャンペーンを見て、1. 版画「赤毛のウルム」

今年の一月八日にスウェーデン大使館において中世バイキングの壮大な北欧の歴史をテーマにした、フラソス・G・ベンクトソンの小説「赤毛のウルム」に取材した、ヨルデイ・マルコのリトグラフ約八〇点のキャンペーンのためのオープニング・レセプションが催され、私も誘われて大使館に出かけた。

大使・作家・その他関係者の挨拶があり、早速展示会場のリトグラフ及び織物を見せてもらった。

リトグラフは素朴で、少々、荒あらしいタッチではあるが、当時の民俗衣裳風習等が同われて興味をそそるものであった。

又、版画表現としても、行き届いた配慮がなされていて、悲惨はユーモラスに転換され、又、中にはリアルにそのままペシミックに展開されているものもあったが後述のように仲々考慮された表現になっていたのは版画家の個性によるものであろうか。例えば、バイキングに掠奪されるシーン等まで、ユーモラスにカリカチュールされ漫画的表現になっているものがあり、そうかと思っただけで、絶望のため魂の抜けたよう陰惨な若い男女の放心したような姿が捕えられていたりする。其処には襲われし者のいたいたい姿がある。

しかし、版画家はそのシーンも距離をおいて冷静にアブのではなくミドル・シーンとして処理表現している。

そのため露骨ではなく、戦争の悲惨さを却ってよく観者に伝えることが出来ている。

主人公の「赤毛のウルフ」の肖像は幾つかあるが、どれも、中世バイキングの服装を再現して、その手に弓などを持ったりしているが、エネルギー溢れる勇姿で、素朴な、強靱な魂の持主として画面一杯にアップで、精密に描写されている。

とりわけ私が関心を持ったのは群衆のさまざまな表情

を持つ顔のアップであった。

それは中世の人間のそれぞれの持つ個性と人生を良く伝えているように私には思われた。

そして、当時の人間の持つ生活力の逞しさが熱気として伝わってきた。

恐らくこれら版画の絵が原作小説に忠実に版画家のイメージに基づいて再現されていると思われた。

この点については原作小説を読んでいない私としては想像で述べるしかないのであるが、恐らく作家のイメージにより忠実に原作小説の再現がなされているものと考えられる。

この「赤毛のウルム」の版画は、この小説を心から愛し、心酔し切っている版画家の真摯な情熱が観者にもろに伝わって来る仲々の力作である。

ただ販売の方法に少々難があるように思われた。それは、版画が全巻一冊のセットとしてのみ販売されていることである。版画作家の気持はわかるが、その中のどの一枚を取っても版画として十分に価値あるものであるので、求める人があれば一冊以外に、ばら売りも考慮してよいのではないかと思われる。

私にも数点、欲しいものがあった。

ばら売りをしても、全巻揃いの一冊が売れないと言うことは無いと思われるため収益は寧ろ伸びるのではないかと思考される。

版画を見終って、大使館の内部を見学し、壁に飾ってある絵画やタペスリー、や調度品と一緒に収集されてあるコーヒー・カップ等磁器類を華麗さに酔い、又、ガラスドアを開けて日本趣味の庭園の太鼓橋を渡ったりして、東京タワー等夜景を楽しむことも出来、楽しい一夜となった。

(H・A)

身の回りにあふれ、ヒトの血液中からも

検出される事態となった防炎加工物質の危険性
ストックホルム大学ワレンベリ・ラボラトリー
のエーヴァ・クラッソン・ヴェーラー助教授(環境
化学)によると、コンピュータなどから“漏れ出る”
防炎加工物質の量を特定する研究が今必要である
という。同助教授の研究グループは、無作為に抽出
した約10のヒトの血液サンプルを調べたが、いず
れのサンプルからも防炎加工物質が検出された。
「たしかに少量とはいえ、この物質が身の回りの環
境に存在している事実が重要」というのが、ヴェー
ラー助教授の意見である。

この防炎加工物質“ポリ臭化ジフェニルエーテル”はPCBに似た物質で、織物生地やコンピュータ機器などに使用されており、たとえば一台のパソコンには、ケースのプラスチック部分や回路基板の防炎加工剤として、通常2kgのポリ臭化ジフェニルエーテルが含まれている。ヴェーラー助教授の見方では、こうした防炎加工製品の生産、使用、そして廃棄の過程で、ポリ臭化ジフェニルエーテルが大気中に拡散しているのではないかとということであり、同助教授は、この物質をPCBと同様、使用禁止にすべきであるとの考えである。

ポリ臭化ジフェニルエーテルが人体に与える影響については研究が進められているところであるが、ヴェーラー助教授によれば、この物質はおそらく甲状腺に影響を及ぼし、その甲状腺で作られるホルモンが新陳代謝をコントロールしていることから、さらに連鎖的な影響が考えられるという。

では、コンピュータからもっと離れて座るようにすれば、自分の身を守ることができるのだろうか？

「いえ、そういうことではないでしょう。この物質の身の回りの環境の中に存在し、バルト海の魚や海底の沈澱物からもすでに検出されているのです。しかも検出量が減少しているPCBとは違って、この物質の検出量は増加しているのです」(ヴェーラー助教授談)。

国際衛生会議に関心を寄せる第三世界の国々

ストックホルムで今年開かれる国際衛生会議で

は、第三世界や東欧諸国からの参加者が倍増し、約200人に対して参加費用の援助が決定している。これはスウェーデン投資技術援護局とスウェーデン労働生活研究所の支援により、総額300万クロネに上る国際衛生会議からの援助が可能になったため。

職場保健衛生ケアグループ5団体に対し、

本年中にISO9002認定か？

スウェーデン職場保健衛生協会品質保証担当のボッセ・ルンドグレン氏の伝えるところによると、スウェーデンでは今年、5つの職場保健衛生ケアグループがISO9002認定を受けることになりそう。さらに来年には、20団体の認定が見込まれるという。また、品質保証インストラクターも、80人が本年中に訓練を終える予定。

在宅勤務にみられる男女の違い

ある調査によると、在宅勤務のしかたにも男女の間で違いがあるようだ。仕事部屋に関していえば、女性はまず家族のためのスペースを優先し、それから自分用の部屋を確保するものの、そこはゲストルームや収納用の部屋を兼ねる場が多いという。

これは、ルンド大学社会学研究所のシャスティン・ヒッテル氏による研究「キッチンテーブルの上のコンピュータ」の中で明らかにされたもので、氏は半自営で働く20人の女性について調べた。ヒッテル氏は、男性の在宅勤務者を対象にした海外の研究についても言及しているが、それによると、男性は自宅に独立した仕事部屋を構え、女性と同じく家族と一緒に過ごす時間をもっと持ちたいと思いつつも、その日の仕事を優先する傾向にあるということである。

ヒッテル氏は、「在宅勤務している女性は給料をもらって働いているとみなされておらず、いつも家族からあれやこれや家庭の用事を頼まれることが多いようだ」と語っている。

スウェーデンのプロジェクトがヨーロッパ

社会基金からの補助金の10%近くを獲得

ヨーロッパ社会基金の第6条プログラムに基づく補助金1億8700万クローネのうち、約10%にあたる1650万クローネが、スウェーデンに配分されることが決まった。

現代の労働環境における新たな問題

スウェーデンでは、数々の古典的な職業病が姿を消しつつあるが、それらに代わって精神的疲労、喘息、アレルギーなど、新たな問題が発生してきていることが、スウェーデン労働生活研究所などによってまとめられたレポートで明らかにされた。

それによると、化学物質や発ガン物質の危険にさらされる労働者の数は減り、金属物質による中毒やアスベスト肺のような古典的職業病もスウェーデン国内ではほとんど見られなくなった。職場での死亡事故も、この25年間でおよそ75%、特に建設現場でのものが減少した。

こうして職場における古くからの危険が減少あるいは消滅したため、新たな問題が浮かび上がってきている。レポートは、過去20～25年間の労働者の精神的プレッシャーの増大を示し、ホテル、郵便局、レストラン、交通運輸部門などの労働者が、他の業種に比べて強いストレスを受けていると指摘している。

しかし、精神的緊張の度合を測定するのは容易なことではなく、周囲からの要求を不当と感じる割合も人によってさまざまである。職場で楽しく働けるかどうかは、本人の職場における影響力によるところが大きいようだ。

これからの職場で大切なもの＝人間関係

産業安全合同協議会が中学校の高学年を対象に行った調査で、未来の職場において重要なものは人間関係であるとの結果が出た。それによると、「良き同僚」が一番重要な要素(97%)で、以下「優れたマネージメント」、「刺激のある仕事内容」、「雇用の安定」と続き、「給料が高い」は7位、「休みがたっぷり取れる」は9位であった。また、「海外へ行ったり、海外で働く機会がある」、「労働時間が自由」は最下位となった。

これは、以前に未来研究所によって行われた同様の調査の結果とはかなりの違いであるが、おそらくここ数年の景気低迷とそれによる高失業率が、若年層の労働観に影響したものであろう。

人間工学的デザインを採用のハンディ型

電動工具のプロトタイプがお目見え

ストックホルムでは5月に、ハンディ型電動工具の人間工学的デザインをテーマに国際シンポジウムが開かれ、参考出品されたプロトタイプの出来栄を見に、40余りの工具メーカーが集まった。このシンポジウムは、産業安全合同協議会の主催によるもの。

シンポジウムに先立つ内覧会で公開されたのは、コードレス・スクリュードライバー、ブラインド・リベッティング・マシン、パワープライヤー、ホースレス・タッカーの四種類の工具のプロトタイプで、人間工学デザイングループがスウェーデン製造業界代表らの作業部会から委託を受け、主な工具ユーザー企業各社の要望を取り入れて開発を行った。

出品されたプロトタイプは、数々の技術的特色により特許を取得し、デザインも意匠登録がなされたもので、これらを提供した人間工学デザイングループのオッレ・ボビエル氏は「ユーザーの安全と健康に対する要求を満たし、人間工学にも適った何がしかのものができたのではないか」とのメッセージを寄せた。

しかし、これらのプロトタイプを見た工具メーカーの中では、人間工学的デザインには関心を示したものの、この種の工具に関して、さらなる市場調査と生産コストの見極めが必要であるとの感想を抱いたところが多いようであった。

シンポジウムの冒頭で挨拶に立った、スウェーデン雇用者連合のクリステル・エルメハゲン氏は、電動工具の事故による損害額が毎年70億クローネに上ることを指摘した上で、出席した工具メーカー関係者に対し、「皆様を今日ここにお招きしたのは、工具の作り手と使い手の間にある距離を縮め、ユーザーの経験に基づく声をフィードバックするための一つの試みです」と語った。

化学物質取扱の新トレーニング教材

化学物質安全取扱国際プログラム(IPCS)は、アフリカ諸国向けの職場安全衛生の教育・啓蒙プロジェクトの一環として、二種類のトレーニング教材の配布を行っている。この教材は、スウェーデンの産業安全合同協議会の刊行物をベースにしたもので、一つは職場での危険化学物質の取扱、もう一つは危険物の運搬に関するもの。

平成8年 活動メモ

- | | |
|--|--|
| <p>1.24. 社会福祉研究会
講師 三瓶 恵子氏
(ジェットロ ストックホルム事務所主任研究員)
テーマ「誕生と死にかかわる福祉」</p> <p>1.29. スウェーデン語講習会冬学期開講(86回目)</p> <p>2.7. 障害者福祉研究会
講師 是永 かな子さん
(東京学芸大学 教育学部)
テーマ「障害者福祉の現場から 8ヶ月の教育実習をもとにスウェーデンと日本の比較」</p> <p>3.1. 日瑞サイエンスセミナー
講師 鶴 英明氏
(特殊法人 理化学研究所研究員)
ヨハン・ベルクヴィスト(atip社 工学博士)
テーマ「インターネットを使った科学技術情報」
共催 atip社、スウェーデン・サイエンス・クラブ、スウェーデン大使館科学技術部、(社)日瑞基金</p> <p>3.23. スカンジナビア・エコロジークラブ研究会
講師 レーナ・リンダルさん(当研究所研究員・元グローブインターナショナル)
テーマ「地球規模の環境問題における日瑞協力の可能性 1・市民活動と教育」</p> <p>4.2. 環境問題研究会
講師 レーナ・リンダルさん
(当研究所研究員)
テーマ「スウェーデンの環境教育とアジェンダ21への対応」</p> <p>4.6. スウェーデン語夏期留学ガイダンス</p> <p>4.10. カール・タム文部大臣講演会
共催 スウェーデン大使館、スウェーデン・サイエンス・クラブ、スウェーデン大使館科学技術部、(社)日瑞基金</p> <p>4.23. スカンジナビア・エコロジークラブ研究会
講師 飯田 哲也氏(日本総合研究所、技術情報部副主任研究員)
テーマ「地球規模の環境問題における日瑞協力の可能性 2 環境教育プログラム」</p> <p>5.9. 第1回 産業技術フォーラム
日瑞対話 「地球環境と技術経営・21世紀への経営戦略と課題」
基調講演 ソーレン・ショレンダー氏
(シャルマース工科大学教授)
共催 スウェーデン大使館科学技術部、スウェーデン・サイエンス・クラブ、(社)日瑞基金</p> | <p>5.14. 児童文学研究会
講師 菱木 晃子さん(翻訳者)
テーマ「スウェーデンの児童文学の近況」</p> <p>6.8. エコロジークラブ研究会
高見 豊氏(日本野外生活推進協会会長)
テーマ「子供の環境教育を考える 野外活動と自然体験」</p> <p>7.2. エコロジークラブ研究会
講師 小沢 徳太郎氏
(環境ジェネラリスト)
テーマ「企業内環境教育の実践とそのあり方を考える」</p> <p>7.12. 比較文学研究会
講師 服部 まこと氏(翻訳家、東海大学)
テーマ「翻訳の楽しさと難しさ・異文化をどう伝えるか」</p> <p>7.19. 社会福祉研究会
講師 河本 佳子さん(マルメ市在住、マルメ大学病院作業療法士)
テーマ「スウェーデンの障害者にたいしての作業療法・(ハビリテーリング)の現場から」</p> <p>8.2・3. スウェーデンガラス・書籍他割引販売</p> <p>8.13. 大自然紀行 エコロジー講演会
講師 山内 正敏氏(スウェーデン王立スペース物理研究所)
テーマ「北方圏の自然・オーロラ現象と人間活動について」</p> <p>8.31-9.9 草の根欧州派遣事業視察実施</p> <p>9.11. スウェーデン語講習会秋学期開講(88回目)</p> <p>10.8. 社会文化研究会
講師 三瓶 恵子氏(ジェットロ ストックホルム事務所主任研究員)
テーマ「スウェーデンの女性起業家たち」</p> <p>11.7. 比較文化研究会
講師 ラーシュ・ヴェリエ氏(スウェーデン大使館公使)
テーマ「スウェーデン人と日本人の考え方」</p> <p>11.21. 社会文化研究会
講師 訓覇 法子氏(ストックホルム大学社会福祉学部大学院)
テーマ「民主主義と教育」</p> <p>12.7. エコロジー研究会とルシア祭
後援 スウェーデン大使館広報部</p> <p>12.7. 丸ビル事務所とお別れの集い</p> |
|--|--|

第三種郵便物認可
昭和44年12月23日

スウェーデン社会研究月報

平成9年7月25日発行

第7・8合併号

通算303号

毎月1回25日発行

編集責任

岡沢憲夫

発行所

社団法人スウェーデン社会研究所

定価四〇〇円